

【ステイトメント】

「人、もの、言葉、その存在と関係性」

私が制作をする上で意識していることは「違和感」「不安定さ」である。

同じものを見る時、私が見ている「もの」と、他者が見ている「もの」は同じであって同じではない。例えば、ステッドラーの鉛筆1本を見る時、私が思うのはユニよりステッドラーを好んで使っていた受験時代のこと、デッサンのことに繋がるが、鉛筆を使ったのが小学生のときくらいの人ならば、繋がる記憶は小学生のときに流行っていたキャラクター鉛筆のことかもしれない。

「もの」に対する自分は、常に通り過ぎた記憶とリンクしているものだと思う。その曖昧で不安定な記憶の中に、ものに与えられた「名前（言葉）」が必ず存在していて、私たちは一瞬のうちに「もの」を識別して「名前（言葉）」に繋げているのだと思う。

私はその「もの」を識別して「名前（言葉）」を与えるまでの時間の中に「違和感」と「不安定さ」があるのだと思う。見たことがあるような気がするけれども記憶の中を掘り起こす作業を進めてもうまく合致しない、知っている近いものと違う、自分の見ているものはこうではない、そういった感覚を作品の中にしまいこんでいる。

日常のものを使うとき、差材を何かしら元のものでない状態にする。それは分解であったり、もともとの色を変えることであったり、形を変えることであったり…。

作品の中で「縫う」という行為を私は大切にしている。縫い包みという、縫って詰め物をした状態で作ることが多い。「ぬいぐるみ」は、幼い頃から私にとって、愛情も執着も残酷さも様々な感情と共に過ごしてきた最も身近な遊び相手だった。だんだんと増え、時間と共にほつれたり汚れたり、興味を失ったものは押し入れの奥に押し込められたり、他人の手に渡ったり、やがて捨てられたり、時には思い出と共に大切にしたり、流行に敏感で、いつもすぐそばにあるもの、それがぬいぐるみだった。友達や兄弟やペットの代わりとして、時には本当の友達や兄弟やペットよりも近い存在になることもある。ぬいぐるみを処分するときには、神社に持って行ったり、お清めに塩をかけてゴミとして出したりと、顔がついていることや思い入れがあることから「念」が入らないようにこうした気を使う人が多い。扱い方により、ぬいぐるみには優しい面も暴力的な面もある。私がぬいぐるみを使うのはそういった人に近く、多面性があるものだからである。

堀田千尋